特　集

いよし国際交流の翼
世界遺産の国 カンボジアの旅

市民の皆さんに、海外の文化に触れ、現地の方との交流を通して国際的な感覚を養ってもらおうと、「いよし国際交流の翼」が実施されました。合併後、初めての実施となる今回は、1月21日から25日にかけて、参加者45人が世界遺産のアンコールワットで有名なカンボジアを訪問しました。

カンボジアは、フランス植民地時代を経て独立後、70年代の「ポル・ポト政権」時の混乱、ベトナム国境紛争、80年代の長期にわたる内戦による「難民問題」など、数多くの困難を経験し、国際的な復興支援が行われてきた国です。90年代以降、市場経済の進展によって、首都プノンペンなどの都市部を中心に経済的繁栄を遂げていますが、現在もなお、農村部の所得格差、低い識字率や子どもたちの教育問題を抱えています。

今回訪れたシェムリアップ市は、農村部にあり、世界遺産の地として有名です。日本のNGOなどの援助によって、学校建設や伝統芸能、伝統織物の復活を積極的に行っている地域でもあります。今回、参加者を代表して、3人の方に交流の報告をしてもらいました。

カンボジア王国
- **■面積**　18.1万㎢（日本の約２分の１）
- **■人口**　1,350万人（2002年現在）
- **■首都**　プノンペン
- **■時差**　日本時間－２時間

苦難の歴史を越え
自然の中で
笑顔があふれる

カンボジア王国

「クメール伝統織物研究所」を訪問して

渡邉芳春さん（上野）

「クメール伝統織物研究所」を主宰する森本喜久男さんは、手書き友禅の職人を約10年経験され、クメール織物へのかかわりは、1980年、カンボジア難民の織物学校講師に応募したのがきっかけだったそうです。伝統文化の復活のため、1996年にNPOとしてこの研究所を設立し、今日まで活動を続けています。2日目の夕食前の講演で、森本さんは、生涯の目標とする織物文化の再興や、約500人の従業員との自給の日々を情熱をもって語られました。

3日目の午前、街中から1時間余りデコボコで埃が舞い上がる道を揺られ、森本さんが主宰する「伝統の森」を訪問しました。絹織物を作るには、蚕の飼料となる桑木、染料植物の栽培や織機材に使う材木の育成が必要です。15ヘクタールの森の一画にある桑畑に、全員で桑木の挿木と苗を約100本植樹しました。また、愛媛はみかんの産地という森本さんのご配慮で、ザボンの苗1本も植えました。人も樹も健やかに太れと念じつつ、農園を後にしました。

最終日には、「クメール伝統織物研究所」を訪問しました。作業場では、10数人の若い女性が生糸を紡いでいました。その色は、潤いのある黄金色で、実に美しかったです。蚕糸は、普通白色ですが、この国の黄金蚕糸を出す蚕が原種で、これを中国で改良したのが我々が目にするものだそうです。通路を挟んで左手には、約10台の手織機があり、ここでも若い女性たちが真剣な表情で、非常に細かく縦糸と横糸の模様を合わせ、1日に20㎝しか織れないという美しい紐を織っていました。

森本さんが目指す伝統織物で、500人が自給で豊かな生活を送るには、まだ道半ばだと思います。森本さんをはじめ従業員の生き生きとした眼、そして笑顔で合掌する誠実な心がいつの日かきっと実ることを願っています。

伝統文化

出会い

日本語を学ぶ学生や青年との交流を通して

亀井慎滋さん（中山町佐礼谷）

今回の「いよし国際交流の翼」は、合併後初めてであり、旧中山町からもぜひとのお誘いを受け、参加させていただきました。慣れない海外旅行の上、初対面の方が多く、不安を抱いていましたが、結団式での西岡団長による「カンボジアの方との交流を大切にしましょう」とのあいさつに、改めて私もその思いを再認識し、出発しました。

ベトナム経由で現地シェムリアップに到着したのは夕方で、早速レストランでの夕食となりました。今回の研修旅行は、遺跡に最も近いホテルに3泊し、世界遺産のアンコールワットをはじめ、多くの遺跡をじっくりと見ることができました。また、現地で「クメール伝統織物研究所」を運営されている森本さんの活動も詳しく知ることができました。小学校訪問では、教室不足からトタン屋根に壁なしの教室で一生懸命に英会話を勉強している子どもたちの様子を目の当たりにしました。

3日目の夜は、シェムリアップで日本語を勉強している学生さんたちとの交流会があり、私の隣には、ホンさんという16歳の女性とブンサムさんという26歳の男性が座られ、食事を共にしました。毎日学校に通って勉強しているだけあり、日本語が上手で、不自由なく意見交換ができました。2人とも日本語ガイドを目指しており、1日も早く夢を叶えたいとがんばる様子がうかがえました。交流会は後半になり、現地のダンスや伊予おどりを一同で踊って一層盛り上がり、最後に日本の歌「瀬戸の花嫁」や「上を向いて歩こう」を全員で合唱し、終了しました。交流をもった2人の方の住所を聞いたので、帰国後も交流を続けていければと思っています。

今回の国際交流では、いろいろな方と交流ができたこと、アンコールワットなどの遺跡群の壮大さに感動したこと等、得るものも多く、思い出深い研修旅行となりました。また機会があれば参加させていただきたいと思っています。

The Kingdom of Cambodia

教育

「ワットポー小学校」を訪れて

大塚房子さん（本郡）

両手を合わせ、私たちを出迎えてくれた子どもたちは、ようやく覚えたクメール語での私のあいさつに、微笑みながら「コンニチハ」の日本語で答えてくれました。キム・チェン校長との対話の席には両国の国旗が飾られ、その話からは、子どもに対するあふれるような熱意が感じられました。私たちからのささやかな文具のプレゼントに対しても、子どもたちに配ると感謝の言葉をいただきました。

事前研修会では、カンボジアの識字率が、男性84・7％、女性64・1％、2000年の中学校進学率は16・1％と聞き、ショックを受けました。長い年月、他国からの侵攻と内戦が続き、人々は生き延びる生活に終始したのでしょう。30年前には学校が無く、子どもたちは木の下で学んでいたそうですが、今年は、校舎も11となり、約4,000人が学んでいます。

教室からは、読み方の練習なのか、元気いっぱい声をあわせて、何かを唱えている幼い声が聞こえました。のぞいた粗末な教室では、机に2人ずつ並んで座り、持っている鉛筆1本を使って、ノートに字を書いていました。語学では、母国語のほかに英語、フランス語、日本語を選ぶことができ、2年くらい学べば話すことができるようになるそうです。学校は、午前・午後の2部制で、子どもたちは、その前後の時間に、家の手伝いや幼い弟妹の世話をしています。

教育は現在、政府の呼びかけで無料ですが、義務教育ではなく、本、文具、衣服等は自己負担で、お金が無い人は学校に来ることができません。校舎もまだまだ不足しており、教師の給料は安く、大変なことだと思いました。

これからこの国を担う子どもたちの笑顔には、はにかみながらも瞳が輝いていました。未来に明るい光が差して欲しいと願ったのは、私だけではないと思います。そして、平和にどっぷりと浸り、すべてに「過」である私たちの暮らしを、今一度考えさせられました。